

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝



あとは『心』ですかね

日本パラスポーツ界の象徴的な存在で車いすテニス世界ランキング1位の国枝慎吾選手が1月22日、ツイッターで「もう十分やりきったという感情が高まり、決意した」と現役引退を表明しました。車いすテニス男子シングルの4大大会制覇「グランドスラム」とパラリンピック金メダルを合わせた「生涯ゴールデンスラム」を唯一達成した偉大な選手です。

出身地の千葉県柏市のテニスクールに、当時では珍しく車いす選手のレッスンがあり、先輩たちのプレーに希望を見だし、11歳の時に本格的にテニスを始めました。しかし、世界を目指すための競技環境は厳しく、コートをはじめ、コート以外の練習施設も思うように使えない経験を数多くしました。北京とロンドンパラリンピック大会で連覇し、実績を重ねたことで周囲の理解が進み、2019年によりナショナルトレーニングセンターに、パラアスリートが優先的に利用できる施設が完成しました。

日本の記者から「日本からなぜ世界的プレーヤーが出てこないのか」と聞かれた男子テニスで初めて4大大会20勝に到達したロジャー・フェデラーさん（スイス）は、「皆さん、日本にはクニエダがいるじゃないか」と答えた話は有名です。パラスポーツ界にとどまらず、全てのジャンルを越えて認められた存在であったといえます。国枝選手は、東京パラリンピックが終わった後、「パラスポーツへの関心が高まり、施設のバリアフリーは良い方向に進んだ。あとは『心』ですかね」と語っていました。－毎日新聞より（2023/1/23）－

東京パラリンピックが大きな契機となって障害者への理解が進み、偏見や差別をなくそうとする気運が高まりました。この高まりを加速させ、心のバリアを取り除くのが教育の役割です。国枝選手の思いに應えるために、どのような子どもになってほしいか、白黒ではなく、鮮やかなカラーで見えるくらい具体的な子どもの将来像をイメージしながら、多様性を尊重できる『思いやりの心』をもつ子どもを育てましょう。



とれたて直送便



「同じゴールに向かって」

冬を越すために南に向かう雁がV字型の編隊を組んで飛んでいくのは、一羽で飛ぶより7割も遠くまで飛べるからです。前の雁が羽ばたくと、後続の雁のために、上昇気流を作り出すことができるので、後続の雁は楽に飛ぶことができます。後ろの雁は、「ガーガー」と鳴きながら前の雁を励まし、先頭の雁が疲れると、最後尾に回って別の雁と交代します。南に向かい仲間同士で助け合って飛ぶことによって大きな力を作り出し、一羽では考えられないくらい遠くまで飛んでいくことができるのです。



年度末は、子どもが一番伸びる時期です。それは「卒業・進級」という節目を迎え、学校が一つにまとまり、子どもたちが仲間と一緒に助け合ったり励まし合ったりするからです。みんなで同じゴールに向かって進むと、1+1が2ではなく、5にも10にもなります。

「早く行きたければ一人で行け。遠くまで行きたければみんなで行け」〈アフリカの諺〉